

本年度の学校評価

本年度の重点目標	1 安全で安心な学校づくり (1) 防災、食の安全、人権への配慮 (2) 教職員の子どもと向き合う時間の確保及び業務の効率化 2 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実 (1) 時代の変化に応じた聾教育の専門性の向上 (2) 主体的・対話的で深い学びの視点での授業改善 (3) 地域、学校間との連携強化 (4) 令和の日本型学校教育を意識した ICT の積極的な活用 3 学校からの発信力の強化 (1) センターの機能の充実 (2) ホームページ、インスタグラム等の活用による情報発信		
担当	重点目標	具体的方策	評価結果と課題
幼稚部	・異年齢集団での活動や社会の変化に応じた指導の充実を図る。	・学年間を越えた活動場面を多く設定することで異年齢との関わりを増やし、協働的な学びや個に応じた指導、支援につなげる。 ・授業や個別指導などの活動単位の工夫を図り、社会の変化に応じた聾教育の専門性の維持向上や保護者支援について考えられるようにする。	・学校生活全般の中で、異年齢を意識した関わりがもてるように積極的に働きかけたことで、集団での関わり方など年齢に応じた成長を個々に促すことができた。また、幼児の様子を職員間で共有し、個に応じた指導につなげることができた。 ・参観日の在り方、保護者教室の回数や内容など、保護者のニーズに応じた支援について部で考えることができたが、よりよい支援について継続して考えていきたい。活動単位や職員配置を工夫しながら、さまざまな働き方の職員にも対応した。
小学部	・個のニーズや社会の変化に応じた教育活動の充実を図る。	・保護者との連絡、連携の機会を大切に、児童の実態とニーズを把握する。 ・令和の日本型教育と聾教育の専門性の両輪を意識した、授業改善を進める。個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実を図るため、部別研修や参観週間を通して、教員間の情報交換や授業研修を実施する。 ・東海地区聾教育研究大会を契機と捉え、教員のファ	・学年内、近隣の学年の担当者間で密に連絡を取り合い、縦割り活動を充実させることができた。その結果、学年学級を超えて、児童の得意なことや好きなことを児童間で共有したり理解したりすることができ、教科内外にかかわらず主体的に活躍する児童が多く見られた。今後とも個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実のため、年間を見通した計画の工夫を行う。

		シリテート力を高めるため、教員自身が研修を通して協同的な学びを行ったり、多様な指導案形式を導入したりすることによって、変化やニーズに応える力を向上させる。	・主体的なグループ協議を中心とした部別研修、参観週間の実施をした。双方向に意見を交わしながら協議を充実させる雰囲気が醸成し、授業づくりを考える機会をもつことができた。また、指導案の形式検討により、育てたい力を明確にした授業づくりに努めることができた。今後、外部専門家活用事業等との連携も含め、教職員の不安感や負担感を軽減しつつも、児童の個別最適な学習を基盤とした教育活動の充実が図れるようにする。
ひがしうら 校舎	インクルーシブ教育を進めるにあたり、地域や学校等と連携し、交流及び共同学習を行う。	近隣の保育園、小学校、高等学校（部活動を含む）と交流及び共同学習（校外学習等）をする機会を設定する。 互いに豊かな人間性や社会性を育むために、伝え合う活動、通じ合う活動を交流及び共同学習の中心に位置付ける。	幼稚部は、生路保育園との交流を計6回、東浦高校の交流を計9回（保育選択の生徒2回、有志7回）実施した。昨年に比べ、交流を楽しみにしたり、積極的に関わろうとしたりする姿が多く見られた。 小学部は、生路小学校と計11回、高等学校と計5回の交流・学習を実施した。居住地校交流に7名児童が参加した。さらに、東浦赤十字奉仕団と防災に関する取組を実施した。今年度は振り返り活動の充実を図った。
教務部	・子どもと向き合う時間を増やすため、業務の効率化を図る。	・出席簿や指導要録作成において、校務支援システムの活用を進め、円滑な運用を目指す。 ・教務に関わる業務についてスリム化を図り、教職員の負担軽減を目指す。	・校務支援システムを用いた出席簿の運用について、軌道に乗せることができた。 ・昨年度まで行ってきた諸検査をとりやめたり書類の所見欄を記入不要にしたりするなど、できるところからスリム化を行った。 ・先生方の授業準備時間の確保を図ることと、いきいきとした授業を増やした。

総務部	・令和の日本型教育を意識したICTの積極的な活用に向けての教育環境の充実を行う。 ・ホームページ、Instagram等での情報発信が円滑に進むよう環境設定を行う。	・小学部児童のタブレット活用を促し、教務部と連携してデジタル教科書の活用、授業支援システムの円滑な活用に向けてタブレット端末の登録・調整を行う。 ・ホームページの管理、Instagramの登録等を定期的に確認し、希望者の登録や最新情報の確認等をする。	・小学部全体でICTを活用した授業改善を教務部と連携して行い、デジタル教科書の使用、授業支援システム（ロイロノート）の効果的な活用を進めることができた。 ・ホームページ、Instagram（校内向け）、note（校外向け）の適切な運用を行うことができた。特に昨年度の反省より、校外向けに活動を発信するnoteの立ち上げが円滑に進んだ。
研究研修部	・聾教育の専門性の向上を目指し、実践を積み重ねる。	・東海地区聾教育研究会に向けての取組をきっかけとし、それぞれの部で授業研究を深めていく。 ・自立活動分野に重点を置きながら、様々な研修を行い、日々の授業に生かす。	・授業に関する主体的な研究協議を行うことで、現在の実践を各自が問い直し、気づきを得る研修を行うことができた。東海地区聾教育研究大会では、研修での気づきを生かして、公開授業等を行うことができた。 ・外部の専門家からの助言を参考にし、日々の実践を振り返ることができた。また、外部機関のオンデマンドを活用した研修では、自分が必要だと思う内容の研修を選択し、自己研鑽することもできた。
生活指導部	・自分の身を守る力や防災に関する知識と技能を身に付けることができる子どもを育てる。 ・自分や周りのことを考えて行動できる子どもを育てる。	・身の回りの危険を予測・回避し、安全な生活に対する理解を深めることができるような防災教育、避難訓練を行う。 ・児童一人一人の思いや考えを尊重し、いじめや差別偏見のない生活を送るための指導や支援を行う。	・避難訓練の計画を、校務のメンバーで意見を出し合ってたてることができた。児童や職員一人一人が身の守り方を考えることができるような訓練ができた。 ・昨年度に引き続きロボット人形を活用しながら、子どもたちの思いに耳を傾けることに努めた。
保健体育部	安全に留意し、健康な生活を送る態度・能力を養う。	・手洗い、歯磨き、からだの清潔など基本的な生活習慣について、集会や保健だよりで幼児児童に呼び掛けたり、児童会と連携を図ってポスターを制作したりして、健康に過ごせるように	・基本的な生活習慣について、集会や保健だより、養護教諭の声掛けなどを行い、少しずつ身につけつつある。児童会とも連携を図り、手洗いを促すポスターを使った呼びかけを行うことができた。

		呼び掛ける。 ・けがをしやすい場面や場所について、事前に注意を促すことで安全に過ごせるようにする。 ・幼児児童が安全に食べることができるように、食材を精選したり、職員同士で食物アレルギーや食に関する指導について情報交換を行ったりする。	・けがマップを作成し、けがをしやすい場所が視覚的にわかるようにし、子どもたちに注意喚起を促した。重大な疾病やけがは発生しなかった。 ・幼児児童の実態に応じて食材の精選を行い、何かあったときにはすぐに周知を図った。窒息につながりやすい食品の共通理解や、調理実習・食べることを伴う活動の食品食材を確認し、安全に食事ができるようにした。
いじめ防止に向けた取組	・問題に対する情報を共有し、学校全体で組織的に指導に当たる。	・年に2回実施する児童対象の「心のアンケート」により早期発見に心掛ける。 ・「学校いじめ不登校対策委員会」を設置し、情報共有を図りつつ学校全体で対応する。	・今年度から、いじめに関する認識アンケートを実施した。SNSなどによるいじめに対する認識が薄いところがあるので、引き続き教員や子どもたちのいじめに対する認識を深めていきたい。
多忙化解消に向けた取組	・職員の在校時間の適正化、健康障害防止に努める。	・定時退校日（午後6時施錠）を毎週金曜日に設定するとともに、授業日の午後7時の施錠を徹底する。	会議回数の減少、校務支援システム及び校務支援員、補助員の活用をとおして、昨年度に比べて平均時間外在校時間を減少させることにつながった。
学校関係者評価を実施する主な項目		- 安全で安心な学校づくり ・防災、食の安全、人権への配慮について ・教職員の子どもと向き合う時間の確保及び業務の効率化について - 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実について ・時代の変化に応じた聾教育の専門性の向上について ・主体的・対話的で深い学びの視点での授業改善について ・地域、学校間との連携強化について ・令和の日本型学校教育を意識したICTの積極的な活用について - 学校からの発信力の強化 ・センター的機能の充実について ・ホームページ、Instagram等の活用による情報発信について	